



はぎわらみき 萩原幹生さん
(昭和13年生まれ・77歳)



こんどうりょうすけ 近藤良亮さん
(香川高専新聞キャンパス4年)

コーディネーターより

萩原幹生さんは、かつて高松港(香川県)と宇野港(岡山県)を結んでいた宇高連絡船の最後の船長を務めた人。子供の頃の夢を叶え、船の仕事をしていく中で感じたことや体験したこと、今の若い世代に伝えたいことなどを熱く語ってくれました。一方、取材した近藤さんは宇高連絡船を知らない世代。船がないと本州へ渡れなかった時代の話聞き、船乗りという仕事、海で働くということを初めて真剣に考える時間となりました。萩原さんは宇高連絡船の歴史や紫雲丸事故などの著書をはじめ、切り絵作家として連絡船があった頃の情景を絵としても残されています。取材は海が見える高台にある萩原さんのご自宅で行われました。

——瀬戸内海で、操船するときに難しいところはあるんですか？
もう難しいところだらけ。高松港は船の出入りが日本で一番多い港でしたから。次から次から船は来るでしょ、それを避けながら走らなければなりません。でも到着が遅れると、今度は列車に間に合わない。当時は、船からそのまま国鉄の列車に接続するようダイヤが組まれていましたから。そこが難しい。
——今は橋ができたから、電車でそのまま海を渡れますが、何か災害が起きたら、船があるかないかは大きいですよ？

もっと若い人の目が海に向いたらいいと思うんだけどね。



船は無くならないですよ、海がある限りはね。

宇高連絡船の元船長 萩原幹生さん(高松市)

萩原さんから受け取った言葉

——子供の頃から船乗りになりたかったんですか？

私は岡山県備前市の育ちで、幼少時から本物の広い「海」を見たことがありませんでした。高校時代、四国に渡ったとき、初めて大きな瀬戸内海を見ました。宇高連絡船に乗船しても、甲板の上に置いたボールを微動だにさせない船の大きさにただただ驚くばかり。その時から私は「船＝海」に憧れてこの年齢になるまで一直線の道を歩んできたのです。

——当時の船乗りの仕事は、どういうことをしたのですか？

ちょうど船の取り換えどきで、最新の電気制御システムを採用した新造船が次々に建造されている時でした。日本の、外国航路向けの大型船舶建造にとって国鉄の連絡船は無くてはならない存在。世界航路の船では日本を離れて再び

いいこと言うね。もし瀬戸大橋が地震で倒れてしまったら、四国は孤立しますよ。じゃあ何が役に立つのか。飛行機と言っても、ヘリコプターくらいだったら飛ぶかもわからないけど。そんなに台数はないだろうし。荷物にしる人にして、一番大量輸送できるのは船なんです。やっぱり日本は島国だからね、船はなくてはならない。海がある限りはね。
——ぼくたち若い世代に伝えたいことはありますか？

もっと若い人の目が海に向いたらいいと思うんだけどね。やっぱり海は綺麗にあるべきで、海に遊びに行ったら、目の前の海を自分の海だと思っただけじゃありません。海にも仕事があります。少し我慢すれば大変楽しい人生を送れますから、ぜひ海を目指してほしいですね。



1 宇高連絡船の開業は明治43年。瀬戸大橋の開通に伴い、昭和63年3月、大勢の人々に惜しまれながら、78年の歴史に幕を下ろした 2 連絡船の乗降口(手前が棧橋側、向かいが船側) 3 萩原さんが最後に乗っていた宇高連絡船「土佐丸」 4 甲板のうどん店が登場したのは昭和44年。以来、いりこの香りが郷愁を誘う宇高連絡船の名物になった 5 プライベートでも大型客船で船旅を楽しむという萩原さん。船長時代の思い出など、海の魅力をたっぷり聞かせてくれました ※1 2 3 写真提供: 高松市歴史資料館

参加者の感想



萩原さんの話を聞いて感じたのは、海の仕事について何も「知らなかった」ということ。これまでも海に遊びに行ったり、船に乗ったりしたことはありましたが、一度港を出たら目的地に到着するのが当たり前だと思っていました。でも実際はたくさん知識と経験が必要で、とても責任の多い仕事ですが、地域の人たちに必要とされ、とてもやりがいのある仕事だと感じました。これからは陸だけでなく海にも目を向けていきたいと思います。

